

令和 元年 5 月 21 日現在

機関番号：82406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11740

研究課題名(和文) 親のがん発症に起因する親子関係の再構築に向けた支援策の開発

研究課題名(英文) Development of support to improve parent-child relationship changed by parent's cancer

研究代表者

野村 佳代(nomura, kayo)

防衛医科大学校(医学教育部医学科進学課程及び専門課程、動物実験施設、共同利用研究施設、病院並びに防衛・その他・教授)

研究者番号：90335589

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：がんを発症した親が、自身の病気を子供にどのように説明するかは、母親と父親で違いがみられた。母親の方が、患者の場合も、配偶者である場合も、子供の理解に合わせて説明しようとしていた。子どもへの説明方法は、小児がんと同様に、子どもの発達段階に応じて違いがみられた。医療者によるがんを発症した親に対する支援は、小児専門看護師による協働の動きもあるが、緩和ケア病棟の成人看護を専門とする看護師やチャイルドスペシャリストのような保育の専門家が、子供に対する支援の一環として活動を広げている。がんを発症した親の、子供への説明に対する支援は発展途上といえ、研究環境を整えながら、継続する必要性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

がんを発症した親が、子供に自身の病気をどのように説明するかについては、母親と父親、子どもの発達段階によって、違いがみられた。このことは今度の子供への説明に対する親への対応に示唆となるといえる。また、医療者や学校関係者による、がんを発症した親をもつ子供に対する多くの支援の現状を明らかにした。医療関係者だけでなく、チャイルドライフスペシャリストのような専門職の活動も大きな役割を担っていることが明らかとなった。未成年の子どもを抱えるがんを発症した親に応じて適切な支援が可能であることを示した。

研究成果の概要(英文)：When parents were diagnosed with cancer, there was a difference between mother and father whether parents explained to their children. The mother explained to the child's understanding. Also, how parents explain to their children depended on their developmental stage. Support provided by healthcare professionals for parent with cancer is being by Pediatric Certified Nurse Specialist as well. Nurses and Child Life Specialists in palliative care units are support children.

It is difficult for parents to explain to their children when they are diagnosed with cancer. We have shown the need for further research.

研究分野：小児看護学

キーワード：子供への説明 親のがん

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

20～40代は、新たな家庭を築き、子供もいる可能性が高い。がんを発症した場合、長期の入院や抗がん剤治療等による身体的影響など、闘病生活に伴う変化が大きい。がんを発症した患者は、がんを受け入れながらも辛い闘病生活を送る。子供は、親のがん発症に伴う言動や情緒的变化や、治療に伴う身体的変化を、日常生活において敏感に感じ取ることから、情緒不安定になりやすい。

子供が情緒不安定となっても、親に対して自身の心情を表出することができない可能性が高い。一方、子供の情緒不安定は、闘病中の親にとっても精神的負担となり、新たな家族危機となる可能性がある。家族危機によって、親子が健全な関係を保てないことは、子供の更なるストレスとなり、成長・発達へも影響する可能性がある。しかし、親は、子供にはがん発症に対する衝撃や精神負担を考慮し、親の病気について説明することは少ないと考える。親の病気について説明できるかどうかに影響する要因を明らかにすることで、がんの闘病生活中であっても、良好な親子関係を築くために、親が子供と向き合い、共に闘病生活や家族危機に取り組むための支援策は、がん看護領域における子育て支援ともなり得る。

国外の研究では、米国のがんの初期段階の患者が、未成年の子供と暮らしており、約30%が6歳未満の子供である(Weaver)としている。米国のがん治療は外来で実施される場合が多く、親の療養生活や身体的影響に直面している可能性が高い。青少年を対象とした研究では、約29%が、様々な対処スキルを活用しながらも感情の対処は難しく、感情や行動上の問題があり(Krattenmacher)、がんを抱える親との同居が感情機能や学校での活動などにおいて子供のQOLを低下させる(Ainuddin)ことを示した。遺伝性のリスクがある場合には子供に積極的に伝えることで親の義務を果たしていると感じている(Farkas)が、親の闘病生活への適応や親子関係の再構築に向けた子供への支援に言及した研究は極めて少ない。

国内の研究では、がんの場合は、特に終末期における家族ケアの重要性(大塚)や、家族機能の特徴(中橋)などが示された。しかしこれらは家族のQOLの低下や環境への適応性など、がん発症による家族全体の生活の変化に対するものであった。個々の家族員については、介護者(櫻井)や配偶者(大久保)などの成人を対象としたものが多い。子供に対する支援については、Hope Tree プロジェクトとして、チャイルドライフスペシャリスト(CLS)が中心となって、親ががんになった時に子供にどのように伝えるかなどの指針が示されている。しかし、親が実際に子供に伝えるかどうかについての意向や、実際の関わりについて明らかにしたものは、極めて少ない。

2. 研究の目的

・親ががんを発症した子供への支援の現状について明らかにする。

1. 親の子供への関わりについて明らかにする。

がんを発症した親が、子供に対して、病気について子供に説明するかどうかについての考えと、実際にどのような働き掛けを行ったのかについて、その要因も含めて明らかにする。

2. 医療者・学校関係者の支援の実際について明らかにする。

医療者(特に看護師)が、がんを発症した親に対して、子供への説明や関わりについて、どのような支援を実施しているのか、その要因も含めて明らかにする。

普通学校の教員が、児童の親ががんを発症した場合には、子供に対してどのような関わりを実施できると考えるのか、その要因も含めて明らかにする。

・親のがん発症を巡る子供への関わりに向けた親への支援策の開発

がんを発症した親の子供への関わりやその影響要因、親子に対する支援の現状から、親子の関係がより適切なものとなるための支援策を検討し、開発する。

3. 研究の方法

・親のがん発症についての親の子供への働き掛けの実際を明らかにする。

対象者：がんを発症した母親 約 15 名（がんの発症部位については問わない）

データ収集方法：対象者に対して、自身の病気について子供に説明したかどうか、それに対する考えと、実際にどのような働き掛けを行ったのか、どのような支援が必要と考えるのかについて、面接調査を実施する。

データ分析方法：面接した内容を逐語録とし、コード化によって構成概念を作り出していく。構成概念から、親の考えとその影響要因、子供への働き掛けの実際とその要因も含めて明らかにする。

・未成年の子供を抱えるがん患者に対する医療者における支援の実際について明らかにする。

対象者：がん患者に接する看護師や医師 約 15 名

データ収集方法：対象者に対して、未成年の子供を抱えるがん患者に対して、子供への説明や関わりについて、実際に行っている支援について、面接調査を実施する。

データ分析方法：面接した内容を逐語録とし、コード化によって構成概念を作り出していく。構成概念から、支援の実際と、支援に対する影響要因を明らかにする。

・がんを発症した親をもつ児童に対する学校関係者の支援への関心を明らかにする。

対象者：普通学校の教員（担任経験者） 約 10 名

データ収集方法：対象者に対して、在籍する児童の親ががんを発症したと想定した場合の、子供への関わり方や配慮について、あるいはどのような支援が可能であると考えられるのかについて、面接調査を実施する。（親ががんを発症した児童が在籍する学校の選定はプライバシー保護の観点から困難と考えることから、「がんを発症したと想定した場合」とした。）

データ分析方法：面接した内容を逐語録とし、コード化によって構成概念を作り出していく。構成概念から、想定される支援と、その影響要因を明らかにする。

・がんを発症した親に対する親子関係を巡る支援の課題と在り方についての検討及び試案の作成

平成 27・28 年度に明らかにした未成年の子供に対する親の関わりと、医療者や学校関係者における支援の現状から、親への支援の課題と在り方について検討する。検討した内容から、Hope Tree プロジェクトが提唱する子供への支援策や小児がんにおける支援策等と関連付けながら、親に対する支援策についての試案を作成し、パンフレットを作成する。

・がん発症を巡る子供への関わりにおける親への支援策の試案の試行

親子関係を巡る支援の課題と在り方を基に、がん発症に伴う親子関係の適切な修復に向けて、子供の情緒不安定の軽減、親の療養生活の意欲向上、適切な親子関係の中での家族危機の乗り越えに向けた試作した支援策のパンフレットを用いて、親及び医療関係

者や学校関係者に試行する。

・試案の試行による評価と改善

試行した結果、その実践を踏まえて、親及び医療関係者や学校関係者に評価と意見をもらう。評価と意見に基づき、試案の内容を検討し、修正を行う。

・親のがん発症を巡る子供への関わりに向けた親への支援策の完成

親及び医療関係者や学校関係者による試案の評価に基づいて支援策を改善し、親ががんを発症した場合の親の関わりに対する支援策を完成させるとともに、子供に説明した後までの親の関わりに対する指針のハンドブックを作成する。このハンドブックの完成をもって支援策の開発とする。

4. 研究成果

・親のがん発症についての親の子供への働き掛けの実際

親ががんを発症した場合、子供に自分の病気についてどのように説明するかについては、母親と父親で違いがみられた。母親は、がんを発症した当事者の場合も、配偶者である場合も、子供の理解に合わせて説明しようとしていた。一方父親は、子供に対して説明すること自体躊躇する現状が明らかとなった。また、小児がんの病名告知と同様に、子供への説明方法は子どもの発達段階に応じて違いがみられていた。

・未成年の子供を抱えるがん患者に対する医療者における支援の実際

医療者によるがんを発症した親に対する支援は、主に緩和ケア病棟でその支援方法を検討されている。支援方法は、子供への対応や、子供への説明に対する親の不安の相談などを、当事者やその家族に対するケアの一つとして実施している。その支援方法は、現在も模索しながら実施している現状がある。緩和ケア病棟に在籍する成人看護を専門とする看護師が主として担っている。小児専門看護師が協働する動きもみられているが、小児の発達段階に応じた関わりへの支援が中心であり、子供への説明に関わる機会は少ない。その他、チャイルドスペシャリストといった保育の専門家が、子供に対する支援の一環として親の病気についての説明などの活動を広げている。

・がんを発症した親をもつ児童に対する学校関係者の支援への関心を明らかにする。

小学校や中学校においては、在籍する児童の親ががんを発症した際には、親が長期に不在となることから多くの場合学校に対して情報提供されている。主に担任などが中心となって、親が不在であることや病気であることに対する子どもの心情に対する支援を行っている。しかし、集団生活の中においては限界があり、親の病気に対する子どもの理解等を聴取するなどの活動は行っていない。

・がんを発症した親に対する親子関係を巡る支援の課題と在り方についての検討及び試案の作成

親・医療者・学校関係者の3側面からの、がんを発症した親をもつ子供に対する支援の現状を明らかにしたが、親が自身の病気について子供に説明することへの支援策を検討するほどの情報を明らかにすることはできなかった。これは研究者の異動や研究協力者の中途での不在などの要因が考えられる。今後、研究環境を整えながら、継続して調査を実施する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：早川 晶

ローマ字氏名：Hayakawa Akira

所属研究機関名：神戸大学

部局名：医学研究科

職名：医学研究員

研究者番号(8桁): 40379376

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。